

アフリカの人々と名付け 41

土地、生まれ、生まれ順

小馬 徹

生まれ順名と地域性

相接し合う川崎市西部と横浜市西南部、ならびにそれに隣接する東京都町田市は、地方から転入する老人が1980年代辺りから急激に増えた一帯として知られている。殊に町田市ではその傾向が著しく、1990年の国勢調査によると、過去5年間に4千人ほどの老人が転入している。その大半は、都市に出て定住した農村出身者が過疎化した故郷から呼び寄せた老親で、俗に「呼び寄せ老人」と呼ばれている。

私が特に興味を持つのは、老親を呼び寄せたのが子供の内の誰だったのか、またそれが特定のタイプの個人名の発現頻度と何らかの関係をもっているかという事だ。しかし、今のところ、そうした事情に関する研究はないらしい。

上の事を述べたのは、他でもない。今回も、前々回の連載から引き続いて、生まれ順名から社会のあり方を考察していきたいからである。こういう観点からすぐに思い出すのが、東京葛飾の土地柄である。

葛飾に太郎なし

鈴木棠三は、「〇太郎」という名前の起こりにふれて、次のように述べた。「一般家庭でも、男子があれば、次三男がいなくても、長男はいる。そこで太郎の人口は、次郎・三郎より多い。そこで平太郎、藤太郎のように姓氏によって区別する必要度が高い。また、平太郎を兵太郎とするような工夫もされる」[『言葉と名前』、1992]。

ところが、それにも関わらず、太郎という名を持つ人がほとんど住んでいない土地がかってあったと言う。まさに、葛飾こそがその土地である。大正初年の葛飾は、田圃と沼沢や湿地が

入り混じるばかりの閑散たる土地だった。だが、大正12年（1923）に起きた関東大震災の後に沢山の者がこの地に移り住むようになり、やがて昭和7年に葛飾区が生まれた。

では、葛飾に太郎と名の付く者が減多にいなかった事情は、何に由来するのか。半村良によると、そこに住んだのは「生まれた家は別々でも、みな次、三男以下の余計者ばかり」だった。だから、葛飾は「本家もなければ分家もない」、「いわば故郷喪失者たち」が寄り添って作った町だったというのだ [『葛飾物語』、1996]。

だが鈴木が指摘した通り、そんな町にもやがて長男が多くなり始める時が来る。昭和8年（1933）生まれの半村の本名は、平太郎である。

生まれ順に因む命名が普通に行われている社会では、生まれ順を示すどの名前がどの頻度で分布するかという事実は、確かにその土地の来歴の一面を表す場合があると言えよう。

ベンジャミン・フランクリン

葛飾という土地の上のような事情を思う時にまず思い起こすのは、日本では避雷針の原理の発見や「時は金なり」という金言を残した事でよく知られ、アメリカの文化の発展に巨大な足跡を残した万能の偉人ベンジャミン・フランクリン（1706-90）である。というのは、彼が末っ子の末っ子の末っ子、つまり三代続いた末っ子の家に生まれた末っ子だったからである。そのゆえからもまた、私には、彼こそが植民地アメリカを代表する人物に思えるのである。

ベンジャミン・フランクリンのこうした出自は、何時も、私には馴染みのある一人のキプシギス人への連想を誘う。その人物の名前は、Taita arap Towet（1925-）——もっとも、言語

学博士でもある彼自身はこの頃 Taaitta arap Toweett と自分の名前を表記している。

末っ子の長男という名前

Taita arap Towet は、ケニアに住むカレンジン群の最大民族であるキプシギスの間で最初に名門マケレレ大学（当時は高校）を卒業したエリートである。その後、行政官から政治家に転身して、ケニア独立（1963）前後の時期に幾度か文部大臣を務めた。

いわば、キプシギスを代表するインテリであり、同時にその政治的なリーダーとしての道を歩き続けたこの人に私が関心を持った一つの理由は、キプシギスとしては何処か取まりの悪い彼の名前にあった。前回述べた通り、Towet は末っ子、Taita は長子を意味する通称であって、正式の名前ではない。ただし、arap とは「～の息子」を意味し、arap Towet は彼がイニシエーションを受けた後にもらった「長子の息子」という父称、つまり正式名である事になる。

だが、Taita arap Towet は、全体として「末っ子の息子である長男」という意味を表すのみだ。それは、誕生時の状況に因む「粥名」や他民族からの牛盗りの勲を讃えた頌歌に由来する「詩名」など、豊かな色彩をもつキプシギスの人々の名前としては無味乾燥で、いかにも異例だという印象を拭えないのである。

余所者である父親

私はやがて、彼の父方の祖父がキプシギス人ではなく、隣のグシイ人であった事を知った。キプシギス人は南ナイル語系の言葉を話す牛牧民であるが、一方グシイ人はバントゥ語系の言葉を話す農耕民である。両民族は長年敵同士だった。いや、キプシギス人がグシイ人の牛を略奪し続けて来た関係であると言ってもいい。

Taita arap Towet には、父親の半生を描いた実録小説の短編がある [“Tears over a Dead Cow”, T. Toweett, *Tears over a Dead Cow and Other Stories*, n.d.]. 彼の父方の祖父は妻

を妖術で失った。彼は一層の後難を恐れ、幼い三人の息子を連れてキプシギスの土地へ逃れた。飢餓の時期には両民族の間の戦いが止み、暫くの平和が訪れるのだが、その機を利したのだった。だが、彼はその暫く後に不慮の死を遂げ、幼い子供たちと養母だけが後に残される。

Towet の父親は彼の三男で Mircha という名前だったが、やがて長男も死に、ぐうたら次男と二人だけになる。Mircha はイニシエーションを受け、艱難辛苦してコウリャンを作り、その僅かな余剰を山羊・羊に換え、次に山羊・羊を牛に換えて蓄財し、働き者の評判を得る。だが、キプシギスに帰化した後も「余所者」の見えざる烙印と、愚兄の愚行、家畜の疫病に絶えず苦しめられ、打ちのめされ続けるのだった。

便法としての生まれ順名

Taita arap Towet の父親の名前 Mircha は、明らかにグシイ人の名前である。しかし、父親の名前に arap を添えて父称を作るキプシギスの命名法に従えば、彼の正式名である父称は arap Mircha とならなければならない。父親 Mircha は養取された人物としてキプシギスになったのはでなく、Chelule Chelule（連れて来られた者）という典型的なキプシギス名でさえ呼ばれ得ない「余所者」だった。それゆえ、Taita arap Towet は父称として arap Chelule を名乗る事さえできなかったのだ——連載第38回参照。

arap Mircha を名乗れば、父親がグシイ人であった事が明白になってしまう。これは全く不利だ。だから、Taita arap Towet はそれを嫌って、arap Towet（末っ子の息子）をもって父称に代えたのだと思う。

キプシギスの土地の南部では、arap Towet という名の人に往々出会った。それはそこが両民族のフロンティア、いわばもう一つの葛飾だったからだ。実は、私が最初に9カ月寄宿した家の主もまた arap Towet と言った。彼もグシイ起源の氏族の人だった。

（こんま とおる 神奈川大学 社会人類学）